

The Authenticity of International Haiku with Seasonal Words: Based on the Mediating Act of Goga Masuda in Haikai, Brazil

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-09-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: SHIRAISHI, Yoshikazu メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00064095

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



季語をめぐる国際ハイクの オーセンティシティについての考察 —ブラジルハイカイにおける増田恆河の仲介行為を例に—

人間社会環境研究科 人間社会環境学専攻
白石佳和

要旨

季語は日本の自然を詠むための詩語であり、和歌以来の伝統的な詩的感覚・文化的記憶の産物である。そのため、自然・言語・文化が異なる国際ハイク（注：国際化した俳句を「ハイク」とカタカナで表記）では季語があまり重視されてこなかった。しかし、季語がなければハイクはただの短詩になる可能性がある。本論文では、国際ハイクにおける季語の問題を検討する。その考察材料として、ブラジルハイカイ（ブラジルではポルトガル語の俳句を「ハイカイ」と呼ぶ）における増田恆河の活動を取り上げる。ブラジルハイカイで有季ハイカイを提唱した増田恆河の論考とポルトガル語歳時記を分析し、それを国際ハイクのオーセンティシティの一例として考察する。増田恆河は、季語を詠むハイカイこそが本格的ハイカイであると主張し、有季ハイカイを推奨した。日本と同じ季語もブラジル特有の季語も、ブラジルの自然を詠むならすべてブラジル季語である、という論を展開し、理論に沿って兼題の句会の開催や有季ハイカイ句集の刊行を行なった。また、『NATUREZA』というポルトガル語歳時記の作成では、理論通りブラジルの感覚の季語を選定し、「詩情」や「感覚」などのポイントに基づいて解説を行なっている。ただ、日本的な解説やブラジルのでない解説も交じることから、季語解説の苦勞が読み取れる。このような彼の理論と実践がブラジルハイカイのオーセンティシティを形成している。ブラジルハイカイの例からもわかるように、北米・南米には日系俳句という日本語の国際ハイクの存在がある。国際ハイクをすべて一様に扱うのではなく、日本俳句、日本語ハイク、国際ハイクをスペクトラムとして捉える視点も必要である。また、季語のオーセンティシティを語る要素の一つとして、俳句の起源である連句が指摘できる。

キーワード

季語、ブラジルハイカイ、国際ハイク

The Authenticity of International Haiku with Seasonal Words: Based on the Mediating Act of Goga Masuda in Haikai, Brazil

Division of Human and Socio-Environmental Studies
Graduate School of Human and Socio-Environmental Studies
SHIRAISHI Yoshikazu

Abstract

As *kigo* is a poetic language used to describe Japanese nature and is a product of traditional poetic sense and cultural memory since waka poetry, it has not been significant in international *haiku* where nature, language, and culture are different. However, without seasonal words, *haiku* could become just a short poem. In this paper, I examine the issue of *kigo* in an international *haiku*. As a material for consideration, the activities of H. Masuda in Brazil are discussed. I analyze the essay by Goga Masuda, who proposed “haikai with a seasonal word” in Brazilian haikai, and the Portuguese chronicle as an example of authenticity in international *haiku*. Masuda argued that a *haikai* that composes seasonal words is a full-fledged haikai, and he recommended the use of seasonal words. He argued that all seasonal words, whether the same as those used in Japan or unique to Brazil, are Brazilian seasonal words if they are about Brazilian nature. In addition, while creating a Portuguese chronicle called “Natureza,” he selected seasonal words with Brazilian senses per his theory and gave explanations based on points such as “poetic sentiment” and “sense”. However, there are some Japanese and non-Brazilian explanations are mixed in, which exhibits his difficulty in explaining seasonal words. His theories and practices demonstrate the authenticity of the Brazilian Haikai. As we can see from the example of the Brazilian Haikai, there is an international haiku of Japanese language called Nikkei Haiku in North and South America. It is necessary to consider Japanese *haiku*, Japanese *haiku* in Japanese in a foreign country, and international *haiku* as a spectrum rather than a dichotomy of Japanese *haiku* and international *haiku*. In addition, as one of the elements of the authenticity of seasonal words, I indicate *renku* as the origin of *haiku*. Although haiku fundamentalists such as Goga Masuda and W. Higginson are now people of the past, the future of the international haiku depends on their successors.

Keyword

Seasonal words, Brazil *haikai*, international *haiku*

1 問題の所在

「俳句」は現在日本の伝統的な短詩型文学のジャンルとして広く知られているが、「俳句」と呼ばれるようになったのは明治期からのことである。俳句が何であるかは俳句の成り立ちによって説明することができる。俳句は、近世の俳諧之連歌（以後「俳諧」と呼ぶ）に由来する。俳諧とは、五七五の長句と七七の短句を交互に詠み連ねていく文芸で、三十六句続ける歌仙、百句続ける百韻などの形式がある。その最初の句を発句と呼び、二句目以降から切り離して鑑賞したものが俳句である。発句のみ作る、あるいは発句だけを鑑賞することは中世の連歌時代からすでにあり、中世近世には発句集も編纂されている。発句が「俳句」として広く知られるようになったのは正岡子規の影響が大きい。

俳句の定義としては、『俳文学辞典』の「俳句」の項に「明治の俳句近代化以後今日に至る季語を含む五・七・五定型の文芸と一応定義できる」¹⁾とある。川本皓嗣は、「もともと連歌の発句には、当座の季節を詠み込むことと、それから五七五で言い切ること」²⁾という条件が課せられていたと述べる。これより、俳句が俳句たる条件は、季節を詠み込むことと五七五である、と言える。

では、海外におけるハイクはどうなるのだろうか。まず、ハイクの国際化をめぐる状況を整理する。日本の俳諧・俳句が国境を越えて欧米に伝わったのは19世紀末から20世紀初頭のことである。ウィリアム・ジョージ・アストン³⁾やバジル・ホール・チェンバレン⁴⁾、ポール・ルイ・クーシュー⁵⁾などによる紹介がその嚆矢である。それからすでに1世紀以上が経ち、俳句の国際化も世界各地で進展した。アメリカ俳句協会 (HAS)、ドイツ俳

句協会 (DHG)、英国俳句協会 (BHS) などの俳句組織が各国に作られ、それぞれの国・言語・文化に応じた展開を見せている。日本でも国際化を推進するため、1989年には国際俳句交流協会 (HIA)、2000年には世界俳句協会 (WHA) が設立され、世界各国の俳人たちの交流や相互理解のための活動を行なっている。2017年には、俳句のユネスコ登録をめざして活動する俳句ユネスコ世界無形文化遺産登録推進協議会が発足した。

俳句の国際化、すなわち日本語以外の言語による俳句の活動において問題となるのは、俳句の定義である五七五の定型と季語を、他の国の言語や文化でどう扱うか、という点である。これは、俳句の本質と大きく関わっている。定型の問題は、日本語という言語のリズムや音韻の問題である。異なる言語で俳句を詠むとき五七五の音律をそのまま置き換えるのは不可能であり、句作りに直結しているため、他の言語での音数律 (五七五) をどう表現するかという問題が早くから検討されてきた。一方季語の問題は、その重要性が早くから論じられながらも実作ではあまり重視されてこなかった。例えば、世界で初めてハイカイ⁶⁾集が出版されたフランスでは、ハイカイ集『水の流れて沿って』を刊行したポール・ルイ・クーシューが日本の俳人について植物の名前の暗示力に注目する発言⁷⁾をしているが、結局「ただ音節の数だけが形を決めている三行詩tercé」⁸⁾とハイカイを定義し、その後のフランスの国際ハイクはあまり季語を重視しなかった。金子美都子は21世紀のフランスの国際ハイクの今後について「従来の定まった日本の『季語』観念にとらわれず、夏石番矢氏も言われるよう、自然環境、文化の垣根を越えての『センシビリティの開拓』を期待したい」⁹⁾と、フランスの国際ハイクの歴史の分析から実作者が季語を必要としない現状を報告する。東聖子¹⁰⁾によれば、欧米の国際ハイクと歳時記を調べた結果として欧米のハイク作者たちが季語の必要性を感じていないという結論に達している。

国際ハイクにおいて、なぜ季語は実作者から重視されないのだろうか。有馬朗人や芳賀徹、金子

兜太らによる「松山宣言」は、俳句が21世紀に世界に開かれた短詩型文学になるための指針を示したものだが、そこでは季語の問題について次のように述べられている。

……日本の俳句は、「自然からたまわるもの」であり、我が国の場合、季感は自然と一体の関係にあることから、季語という要素が俳句に不可分に結びついてくるのである。一方、風土が違うところに日本の季語を持ち込むことには無理がある。このことは、今後俳句が世界化する際に、その内容が世界の中の地域の特性にますます傾くことが考えられる……季節すなわち自然を詠むということは人間と自然との関係を俳句的精神から考え直すという意味で非常に重要であるが、それを季語という形で形式化することはまた別の問題であり、俳句を世界的視野で語る場合には、季語というルールを強制することは無理があるかもしれない。

ここに、季語が国際ハイクにおいてあまり重視されない理由がうかがえる。季語は俳句の本質の一つであるが、その季語は日本の季語であり、世界のそれぞれの地域の自然や風土に無理に合わせることはできない。日本のように四季がはっきりと分かれる国でないなら、季語というルールに拘る必要はないのではないかと、という意見はもっともである。

しかし、季語がなければ「ハイク」はただの短詩になる可能性がある。果たしてそれが本当に「ハイク」なのだろうか。

以上のような問題意識から、本論文では、国際ハイクにおける季語の問題について検討したい。その際、考察の材料として、ブラジルハイカイにおける増田恆河の活動を取り上げる。国際ハイクにおいて季語を重視する動向は、アメリカにおける活動が報告されているが、ブラジルの増田恆河の活動はまだほとんど知られていない。彼はブラジル日系人であり、初めはブラジルで日本語の俳

句を詠む日系俳句の俳人の一人であったが、1980年代後半からポルトガル語で作るブラジルハイカイに関わるようになった、非常に独特な経歴の持ち主である。増田恆河は、日本語とポルトガル語の2言語でブラジル歳時記を編纂した点でも、注目に値する。彼は異国の地ブラジルで、季語をどのように考え、ポルトガル語のブラジルハイカイに取り入れようとしたのだろうか。言い換えれば、ブラジルのハイカイの俳句らしさ=オーセンティシティをどのように考えたのだろうか。増田恆河の活動を例に季語をめぐる国際ハイクのオーセンティシティの問題について検討するのが本論文の目的である。

なお、用語の表記について整理しておく。本論文では、日本の俳句を「俳句」、国際化した俳句を「国際ハイク」（日本以外で詠まれる俳句、多くは外国語で詠まれる）と表記する。例えば、英語で詠まれたアメリカ・イギリスなどの俳句は英語ハイクである。但し、日系人の作った俳句は「俳句」と表記されるため、それに従う。筆者は日系俳句（移民先の国で日系人が日本語で詠んだ俳句）を「国際ハイク」の一形態と考えるが、日系俳句に「ハイク」が用いられている資料は管見の限りない。また、日本の俳句の源流である俳諧は漢字で「俳諧」、フランスやブラジルの国際ハイクはカタカナで「ハイカイ」と表記する。俳句の外国での受容が始まった19世紀末から20世紀初頭はまだ日本で「俳句」という呼び名が一般的ではなかったため、近世の俳諧が「ハイカイ」「ホック」という名でヨーロッパに取り入れられた。特にフランスでは長くハイカイと呼ばれ20世紀後半から「ハイク」と呼ばれるようになった。そのため、フランスのフランス語による俳句は、「フランスハイク」「フランスハイカイ」の二つの呼び方がある。フランス経由で俳句を受容したブラジルでも俳句は「ハイカイ」と称され、現在も「ハイカイ」と呼ばれている。それゆえ、本論文ではポルトガル語によるブラジルの俳句を「ブラジルハイカイ」と統一して呼ぶ。

2 国際ハイクにおける歳時記の取組とブラジルハイカイ

2.1 ヨーロッパ・北米・南米の国際ハイクにおける歳時記

国際ハイクの季語についての基本文献として、世界各国の国際歳時記を比較した『国際歳時記における比較研究』（東・藤原編2012）が挙げられる。本書では、中国・韓国など東アジアを始め、アメリカ、フランス、ドイツ、イギリス、スペイン、ブラジルの欧米各国の季語や歳時記についての論文が集められている。また、アルゼンチンの国際ハイクの状況を詳細に論じた井尻香代子『アルゼンチンに渡った俳句』には「国際ハイクと季語」「国際ハイクと歳時記」の章が設けられ、季語や歳時記について論じられている。本論文では、東アジアやその他の地域は扱わず、欧米と南米の考察を行う。

東・藤原編（2012）を参照しながら、欧米各国の国際ハイクにおける歳時記について簡単に触れておく。アメリカでは、1970年に日系人の元山玉萩編『ハワイ歳時記』が出版された。アメリカで初めての歳時記であり、日本語で記述され、季語項目の英語訳、日本語の季語解説・例句がある。また、元山と同じ日本の俳句結社「ゆく春」に所属していた徳富潔、徳富喜代子が西海岸で有季定型俳句研究会を設立し、俳句における季語の活用と研究、啓蒙活動を行なった。『Season Words in English Haiku』『モントレイ湾岸地域歳時記』などの歳時記も出版した。一方、アメリカ俳句協会のウィリアム=ヒギンソンは、1996年に『俳句の季節』『俳句の世界』¹¹⁾を出版した。前者は季語に関する評論であり、後者は歳時記である。フランスでは、日本文学研究者アラン・ケルヴェルスが日本の『日本大歳時記』（水原秋桜子、加藤楸邨、山本健吉編監修、講談社、1981）を翻訳した『Grand Almanach poétique japonais』が1988-1994に五分冊（新年、春、夏、秋、冬）で出版された。また、ドイツでも日本の歳時記『新歳時記 虚子編』（三省堂）の翻訳である『Singen von

Blüte und Vogel』が出版されている。竹田賢治「ドイツ歳時記と四季の詞」(東・藤原編2012所収)によると、四季別句集は多いがドイツ歳時記はまだ刊行されていないとのことである。イギリスにおいては、元英国俳句協会会長(1997-2002)デーヴィッド・コブが『英国歳時記』(2004)を出版したが、コブ氏自身、英国のハイク詩人が日本のように季語を活用してハイクを作るようになるにはまだまだ時間がかかると述べる¹²⁾。スペインには歳時記(翻訳含む)はなく、「キゴ」入りハイクもあるが日本のような意味での季語はなかった(田澤佳子「スペイン語とカタルーニャ語のハイク—普及活動と「キゴ」の概念」東・藤原編2012所収)が、2013年に太田靖子とエレナ・ガジェコによる日西対訳版『季語』が刊行されたとの報告¹³⁾もある。

このように、欧米では、日本の歳時記の翻訳(フランス、ドイツ)や歳時記作成の試み(アメリカ、イギリス、スペイン)が見られた。特に、アメリカのヒギンソンは季語についての理解が深く、本格的な歳時記を作ると同時に季語についての理論と実践方法を提示し、季語の啓蒙に努めた。また、日系人たちのローカルな歳時記の作成の活動も特筆すべきである。しかし、季語への関心の高まりはあるものの、どの国でも「季語や季節の詞は、創作上の必然性は現在のところほとんど認識されていない」(東聖子「はしがき」東・藤原編2012所収)と結論付けられている。

南米については、いくつか研究があるがまだまだ知られていない。井尻香代子(2019)『アルゼンチンに渡った俳句』はその嚆矢と言ってよい。同書によれば、アルゼンチンには、日系移民の日本語俳句の流れとフランスのクーシュー経由の「ハイカイ」の流れがある。また、井尻自身が研究の形を取りながら、現地でのアルゼンチン歳時記構築に向けてデータを提供するなど仲介・エンパワメントを行なっている。ブラジルも、日系人の日本語による日系俳句の流れとフランス経由のポルトガル語によるブラジルハイカイが併存する状況である。日系人による「ブラジル歳時

記」が、『アマゾン季寄せ』も含め八種確認¹⁴⁾されており、ブラジル特有の「ブラジル季語」についての研究¹⁵⁾も進んでいる¹⁶⁾。ブラジルハイカイについては、増田恆河編『NATUREZA』という本格的な歳時記がある。増田はほぼ同時に日本語歳時記『自然諷詠』も出版している。彼は1987年にグレミオ・ハイカイ・イペーというブラジルハイカイの研究会を立ち上げ、有季ハイカイを推進する活動を行なっている。

2.2 北米・南米の日系移民と歳時記

このようにヨーロッパ(イギリス、フランス、ドイツ、スペイン)、北米(アメリカ)、南米(アルゼンチン、ブラジル)の国際ハイクの展開を概観すると、北米と南米の共通点が見えてくる。それは、日系移民の存在である。アメリカでは、2.1で述べたように、移民の中に日本の俳句結社「ゆく春」の同人がおり、その流れで『ハワイ歳時記』が作られ、有季定型俳句研究会の啓蒙活動につながっている。アルゼンチンでは、歳時記こそ作られていないが、久保田古丹、崎原風子らが日本語の俳句とスペイン語の俳句の啓蒙活動を行なった。ブラジルでは日系俳句の集大成とも言える佐藤牛童子編『ブラジル歳時記』が2006年に出版され、ポルトガル語のブラジルハイカイにおいても日系人増田恆河が有季ハイカイを主導し、先に触れた『NATUREZA』を編纂している。それぞれの国の国際ハイクに日系移民が重要な役割を果たしていることがわかる。これは、移民国家である北米・南米の特色と言える。

国際ハイクといえ、英語ハイクのように日本語以外の言語で日本文化以外の背景を持つ人々が異国の地で詠んだ俳句を連想するが、日系俳句は国際ハイクと言えるのだろうか。ほとんどの場合、日系俳句は日本語で詠まれる¹⁷⁾。日本のアイデンティティを持ち日本文化もある程度受け継いでいるが、現地に長く住めば住むほど、現地の文化になじんでいく。また、詠む対象は現地の季節であり自然である。日本語を使用することで俳句の国際化における必然的な二つの問題のうち、定型の

問題はなくなる。しかしもう一つの季語の問題については、地域の自然と向き合う点において現地語による国際ハイクと同じ課題に取り組まなければならない。むしろ、日本語を使うことで日本文化の思考や枠組みに囚われてしまうことも予想できる。国際ハイクの大きな問題のうち少なくとも片方は共有しているゆえ、日系俳句も国際ハイクに加えてもよいのではないか。

「1 問題の所在」でも述べたように、本論文では俳句の国際化におけるハイク活動の大きな問題の一つである季語の問題を検討することである。ハイクの創作において季語が重視されない状況が続く中、なぜ世界各地で季語をめぐるオーセンティシティの問題が浮かび上がるのか。それは、ハイクがハイクであるためには、短詩型以外の俳句性が必要だからである。季語がなければ、ハイクは単なる短詩であり、ハイクではなくなってしまうのである。有馬他1999「松山宣言」によれば、「俳句に対する世界的な共通認識としては、『短詩型』と『俳句性』ということにつける」と述べ、その俳句性に、季語が大きく関わっている、とする。では、それぞれの国でどのように俳句性の問題に取り組むのか。先行研究から、国際ハイクの活動を行なっているすべての国で季語について何らかの取り組みを行なっていることがわかった。自国独自の歳時記が必要である、と考える国もあれば、歳時記は日本からの翻訳で十分、とする国もある。その取組の展開の様相は多様である。

その中で、アメリカとブラジルの二国は、日系俳句と国際ハイクの二つの流れがある点で独特の展開が見られ、また自国独自の歳時記や日系俳人の歳時記が作られている点で季語重視の傾向が強く表れている。アメリカの国際ハイクにおける季語重視論についてはすでに報告がある¹⁸⁾ので、本論文ではまだほとんど知られていないブラジルハイカイを取り上げる。また、日本語の歳時記とポルトガル語の歳時記を編纂した増田恆河の存在も、ブラジルの二つの国際ハイクに関わっている点で特徴的である。さらに、ブラジル日系俳句に比べてブラジルハイカイの研究が進んでいない点

でも社会に貢献できると考えた。

3 日本における季語・季題の成立

季語をめぐる国際ハイクのオーセンティシティを考察する前に、そもそも日本における「季語」とは何か、検討しておく。『俳文学大辞典』の「季語」¹⁹⁾の項によると、「季を表す詩語としての季語は、四季の変化に富み寄物陳思の伝統を負う日本の文学風土の中で、作者と読者との共通理解を媒介し、俳句の様式性を支える核としての効用を発揮してきた」とある。つまり、和歌の四季の歌の伝統を背景に持ち共有することで、作者と読者との共通理解を成り立たせ、俳句を俳句たらしめていた、ということである。和歌は四季の歌ばかりではないが、『万葉集』以来四季を詠む歌が多く、題詠なども行われた。川本(2019)によれば、「和歌で季節に関わる歌語(季の詞)が盛んに用いられ、題詠が繰り返されているうちに、その『本意(主な興味)』が徐々に固まっていき、のち連歌では、一巻のあちこちに、一定のきまりにしたがって季節の語を配置する必要上、季語の季節をただ一つに限定する必要が生じ」²⁰⁾、それが発句を含めた俳諧にも受け継がれたのが俳句の季語の由来である。

では、その日本の季語の本質を日本だけでなく世界の中で相対化するとどうなるだろうか。代表的な論考を二つ紹介する。一つは、先に引用した「松山宣言」である。そこでは、「季語とは和歌以来の日本の伝統的な詩的感覚・体験の蓄積であり、これを世界的視野で言い換えれば『その民族特有の象徴的な意味合いを有するキーワード』ということである」と述べている。「象徴」という言葉がキーワードとなり、民族特有のシンボリックな言葉に国際ハイクの季語になりうる可能性を期待している。二つ目は、ハルオ・シラネ(2001)の『芭蕉の風景 文化の記憶』である。彼は、歳時記が「偉大な季節・地誌のアンソロジー」であり、文化的記憶つまり詩歌を読み作るために必要な自然と風景の感覚、時間と空間の感覚を作り出

すコード化された連想の知識を保存する場所だと述べる。

二つの論に共通して言えるのは、季語が伝統的な背景を持つ詩語である、ということである。和歌以来の季節の数多くの歌の集積があり、そこから抽出された季節の言葉が季語である、というのである。国際ハイクで日本の季語を強制できないのは、自然や景物が異なるからだけでなく、それらの自然・景物が詠まれた詩歌の中のことば、文化的記憶も異なるからである。

以上、日本における季語についての主な意見をまとめた。その上で、国際ハイクにおける季語の問題のポイントを整理すると、1 自然（風景、景物）の違い、2 季節観の違い、3 伝統的な詩語・詩的感覚の違い、の三点となる。また、歳時記編纂の方針なども、重要なポイントになると思われる。

4 増田恆河の論考の分析と考察

4.1 作者増田恆河の活動の経緯

増田恆河は、1911年香川生まれ、1929年に移民として渡伯した。1935年からブラジル俳句の父佐藤念腹に師事し、日本の俳誌『ホトトギス』や念腹主宰のブラジル俳誌『木蔭』などに投稿していた。1980年代に、グレミオ・ハイカイ・イペーというハイカイ研究会の創設（1987年）に加わったことから、ブラジルハイカイに積極的に関わるようになった。その功績が認められ、2004年に正岡子規国際俳句賞を受賞した。

彼は、ブラジルハイカイの歴史や現況についての論考を、1986年、1994年、1996年の3回、日本の雑誌（『俳句文学館紀要』）に投稿している。それをもとに、彼のブラジルハイカイに対する考え、とくにブラジルハイカイにおける季語についての考え方を分析し、季語をめぐる国際ハイクのオーセンティシティについての考察を行う。

4.2 増田恆河の論考の構成と内容

最初の論考は、「ブラジルのハイカイ」（増田

1986）である。この論考は、ブラジルのハイカイ事情（主に1940年代まで）を紹介した内容で、1919年にアフラニオ・ベイショットが初めて俳句について述べたブラジル語の文献の紹介に始まり、ブラジルの詩人が実作に至る経緯、日本移民の俳句事情、ハイカイの実作の紹介、俳句翻訳の苦心などについて述べられている。

その中に、「三つの俳論」という小節があり、ハイカISTA（ブラジルの詩人で俳句を句作する人）がどのように俳句を受容したかについて三つのタイプに類型化している。一つは「俳句の内容を重視する論」、次は「俳句の詩型を重視する論」、最後に「俳句の季語を重視する論」について言及している。季語を重視する論では、「高浜虚子の影響を受けて、俳句には季題の存在が重要であることを説くフォンセッカ・ジュニオールの論²¹⁾」を紹介している。そこでは季語について、「少なくとも、間接的にでも季を反映させなければならない」、「季語によって句の詩的内容が巧まらずに流露されねばならない」と述べられ、季語がなくても季節の感じを詠み込むのがよく、詩的な内容をさりげなく表現するツールとして季語が推奨されている。

「結び」の節²²⁾には、1986年時点でのブラジルハイカイに対する増田の考えが率直に述べられている。まず彼は、「ブラジルの土におろされたハイカイの種子は見事に発芽し」たが、ポピュラーとまでは言えないハイカイの現状を把握する。一方、日系人の間で盛んな俳句がやがて衰退する運命を見越してハイカイに将来性を見出している。「やがて衰退する」理由は、俳人の高齢化と日本語継承の問題である。日系社会が徐々に世代交替し日本語が使える日系人が減少するのは時代の趨勢である。

つまり、ここからは、増田恆河が日本の俳句をブラジルに根付かせ大きく育てたい、と考えていたことが読み取れる。彼は「日本固有の俳句（俳諧趣味）を“ブラジル化”する真摯な努力とともに、その紹介と普及が強化されねばならない」こと、「ハイカイ活動の牽引車となる有力なハイカISTA

タの出現」を今後の重要課題として挙げている。努めて客観的に述べられているが、その後の彼の活動を見ていくと、実はこれは増田自身のテーマであり、戦略目標だったのではないかと思われる。たとえば、この「ブラジルのハイカイ」の論考は、ポルトガル語に翻訳され、1988年ブラジルにおいて「*O HAikai NO BRASIL*」というタイトルで出版されている。また、「ブラジルのハイカイ」の「結び」の中に「欧米におけるように、学校の教科書に俳句が紹介されたり、ハイカイ・コンテストが企画されたりした場合には、意外なブームが巻き起るかも知れない」との記述があるが、この論文が発表された1986年の年末には第一回ブラジルハイカイ集会所が開催され、ハイカイ・コンテストが行われている。さらに、増田はグレミオ・ハイカイ・イペーでの子どもハイカイの活動にも期待を寄せていた²³⁾。彼の「予言」とその実現からは、予言の実現への彼の関与が推測でき、ハイカイをブラジルに根付かせたいという彼の意志の強さを感じる。

次の論考「ブラジルにおけるハイカイの近況」²⁴⁾ (増田1994) は、ブラジルハイカイの80年代以降の近況の報告である。80、90年代を中心に出版物からみたブラジルハイカイの伸展をまとめたのち、ハイカイ集会所の開催、雑誌のハイカイ欄、ハイカイ研究グループ、日系社会とハイカイ、ハイカイと国際交流、などのテーマについて論じている。

増田は奥の細道の成立三百年にあたる1989年を境にハイカイブームが起こったという認識をもっている。その背景として「積極的なハイカイ活動」があり、1980年以前に比べると質量ともに大きく厚みを増したと感じている。その中で特にハイカイと季語の問題に注目し、次のように述べる。

殊に注目に値する点はハイカイの質的変化である。つまり、これまでのハイカイは単に短い詩型であるという点にのみ興味を持つ傾向にあったものが、季語を詠む本格的ハイカイへと転化し始めたことである。²⁵⁾

ここで増田ははっきりと季語を詠むのが「本格的ハイカイ」であると述べ、ブラジルハイカイはそちらの方向へ変化を始めた、と認識している。グレミオ・ハイカイ・イペーの研究・実作や年次ハイカイ集会所の開催などのハイカイ活動に増田が関わっていることを考慮すると、「変化を始めた」というより「積極的なハイカイ活動を先導した」と表現したほうがいいかもしれない。ハイカイの本質として季語を重視する立場を明確にしたのがこの論考である。

また、この時期のブラジルハイカイの発展の背景の一つとして、第2次大戦後に見事に経済大国として復興した日本へのブラジル人の関心が大きく影響している、との指摘は興味深い。ブラジル社会に、日本の復興の謎の鍵が文化にある、という認識もあったようである。

最後に、俳句とハイカイの関係について、次のように述べる。

……ハイカイの祖である俳句は伝統を守り、不易流行の健全な俳句としてハイカイのプロトタイプであって欲しいのである。そうして、俳句の真髓がいろいろな形でブラジルに伝わり、ハイカイの向上につながる事が望ましい。ただし、“日本の俳句の押し付け”であってはならない。ハイカイは俳句の模倣ではなくブラジルの自然の中に生まれたブラジルの詩であることを忘れてはなるまい。²⁶⁾

日本の俳句と国際ハイク（ここではブラジルの「ハイカイ」）を区別し、俳句の真髓、すなわち俳句の本質がブラジルに伝わり「ハイカイの向上につながる事が望ましい」と考える増田の論は、季語を形式的に導入するのではなく、俳句の本質である「民族特有の象徴的な意味合いを有するキーワード」として季語を捉えんとする「松山宣言」の考え方に近い。前後の文脈や他の論考から推察する²⁷⁾と、この俳句の「真髓」とは、季語を念頭に置いていたと思われる。ブラジルハイカイは、日本の季語を強制・模倣するのではなく、「

ラジルの自然」を詠むブラジルの詩なのだ、と増田は定義する。これは、ブラジルハイカイの一つの方向性を示したと言えるだろう。

最後の「ブラジルにおけるハイカイの季語」(増田1996)は、ハイカイに季語が詠まれるようになった経緯と彼の季語に対する考えについて叙述している。ハイカイの初期から1987年までは無季ハイカイの実作がほとんどであり、季語についての発言もほとんどなかったが、1986年12月に第一回ブラジル・ハイカイ集会在開催された翌年2月、集會に参画したメンバーでハイカイ研究をおこなう話が持ち上がり、のちにその研究会がGrêmio Haicai Ipê (イペー・ハイカイ同好会)と名付けられた。その会で季語についての議論がおこり、季語の研究と実作が行われた。

季語についての議論がおこったきっかけとして、次のようなエピソードが紹介されている。1987年4月の例会で、日本の俳句が発句を起源とし、発句に季語を必要としたのでハイカイにも季語が必要だろうと増田が話すと、季語とは何かという質問があった。「季語とは四季のそれぞれを代表とする季節の言葉である」と答えると、ブラジルには日本のような四季がなく、サンパウロは朝昼晩の気温差が激しいので一日の中に四季があるようだ、と参加者たちから「攻撃」された。季語を「寒暖を表す気象用語」と理解されたようなので、次の例会では、年に1度しかない事象について質問した。「イペー」は年に何回、いつごろ咲くか、ナタルは年に何回、いつごろか、などである。そのやりとりで、「出席者一同が納得した」とある。季語を押し付けるのではなく、現地の人たちと対話を重ね一つ一つ了解しながら季語を受容していった様子うかがえる。

グレミオ・ハイカイ・イペーでは、季語の研究の一つとして、兼題による句作を継続し、1991年から1995年まで毎年有季ハイカイの句集を刊行した。これは、ブラジルハイカイにおける季語の定着とポルトガル語歳時記の作成に貢献するものである。

増田(1996)の後半は、増田の季語論が展開さ

れる。増田(1994)での「ハイカイは日本の俳句の模倣ではなく、ブラジルの自然を諷詠するブラジルの短詩である」という理念が繰り返され、ブラジルの自然をハイカイとして詠むことは「日本の季語を詠む」ことではなく、自然の中にある季節の言葉をテーマとすることである、と述べる。増田は、国際ハイクにおける季語の問題を、「ブラジル季語」というキーワードを使って説明する。ブラジルの日系俳句では、すでにいくつかの歳時記が作られていることはすでに述べた。増田恆河の『自然諷詠』(1995)を含め、1996年の時点で五つの歳時記が作られている(栢野2006)。それらの歳時記の季語には、日本で作られた歳時記にある季語をそのまま流用したものとブラジルの自然(人事を含む)に依拠した新しい未熟な季語があり、後者をブラジル季語として区別していた。しかし増田の考え(「ブラジルの季語」増田1995 pp. 355-360)では、「長い伝統を持った文化所産である日本の季語も、よく考えてみると、ブラジルの風物を詠んだ場合には、日本の季語としての機能を失っている」ので、ブラジルで詠まれた俳句のすべての季題は、日本由来の季語もブラジル特有の季語も、如何なる国語によって表現されてもブラジルの季語であるとする。

4.3 三論文の展開からみえる増田の季語重視の論

三論文を整理すると、次のように展開していく。まず「ブラジルのハイカイ」では、ブラジルハイカイの歴史を紹介しつつ、日系人の立場から日系俳句よりブラジルハイカイに将来性を見出し、それを成長させるための戦略を提示する。次の「ブラジルにおけるハイカイの近況」では、1980年代以降のブラジルハイカイの近況を述べながら、ブラジルハイカイを「本格的ハイカイ」にリードするグレミオ・ハイカイ・イペーの活動などの経過報告をする。その中で、ハイカイの本質を季語と定め、季語を重視するブラジルハイカイの方向性を明示する。最後の「ブラジルにおけるハイカイの季語」では、季語重視の方針に沿ったいろいろな活動をまとめ、ハイカイの本質である

季語について自分の考えを述べている。

増田はブラジルハイカイについて客観的に叙述するが、実はその活動の中核に増田が関わっていることは何度か指摘した。日本の俳句をブラジルハイカイにしっかり根付かせるという目標を立て、ハイカイ集会の開催、研究会の設立、季題による句作活動、有季ハイカイ句集の刊行など、極めて戦略的に活動してきた。この三つの論考はその活動記録の一面も持つだろう。

増田の季語論の特徴は、やはり「ブラジル季語」の考え方にあると考える。国際ハイクにおける季語の問題を「ブラジル季語」の概念の敷衍によって説明する論理は、他の国にみられない特徴である。季語の持つ内容が日本とブラジルで共通している、「月」や「花」などの言葉も、日本とブラジルでは感じ方が異なる。それゆえ、それらの言葉もブラジル特有の季語もブラジルで詠まれた俳句の季語はすべて「ブラジル季語」とするのである。

3で挙げた国際ハイクにおける季語の問題のポイントのうち、「1 自然（風景、景物）の違い」と「2 季節観の違い」は、この考え方で説明できそうである。3の「伝統的な詩語・詩的感覚の違い」について、増田恆河はどう対処したのだろうか。季題の研究や兼題のハイカイの句作、有季ハイカイ句集の刊行はどれも、新たなブラジル季語の創出の試みであると言える。その集大成として、ポルトガル語歳時記が1996年に出版される。次節では、その歳時記について分析と考察を行いながら、3の「伝統的な詩語・詩的感覚の違い」についての増田の対応を検討する。

5 ポルトガル語歳時記『NATUREZA』の分析と考察

5.1 『NATUREZA』の特徴

『NATUREZA—BERÇO DO HAICAI』（タイトルの邦訳：「自然：俳諧の揺籃」）は、増田恆河とテルコ・オダの二人の編者による初の本格的ポルトガル語歳時記である²⁸⁾。その特徴は(1)春・夏・秋・冬の順番²⁹⁾(2)季語解説の部(kigologia)

と例句の部(antologia)に分かれることである。また、巻末には、「柿とハイカイ」「ハイカイのアイデンティティ」「ハイカイの十戒」「季節の言葉」「理論と実践」「季語の大切さ」「芭蕉の詩歌と禅」「ハイカイのローマ字」の短いエッセイがある。

白石(2021)によれば、季語の見出し語数は1400(春:301, 夏:592, 秋:283, 冬:223)、前年に刊行された増田恆河編日本語歳時記『自然諷詠』(見出し語数1580)とほぼ同規模である。それぞれの季節は、時候・天文・地理・動物・植物・人事の六つの季題別分類に分かれる。二つの歳時記を比較すると、『NATUREZA』の季語項目は『自然諷詠』と重なる部分が多い。新たに立項された季語はあまりなく、動物・植物では『NATUREZA』に異名の立項が目立つ。これは、「ブラジルにおいても自然の観察が進めば、新季語が次々に生まれるであろうし、地方の風俗習慣を審さに研究すれば、現在、ハイカイスタに知られていない数々の祭礼・行事など、地方色豊かなKIGOになるものが多々あるはずである」³⁰⁾との増田の発言に一致する。また、『自然諷詠』の中の「日本季語」(日本特有の诗情・感覚を持つ季語)がかなり取り除かれていることも確認されている。これも、「日本の俳句を強制しない」「ハイカイは俳句の模倣ではない」との増田の主張に沿った編集方針である。

5.2 季語解説の分析

『NATUREZA』の解説部分の特徴として、Poét(诗情)・Sensação(感覚)が含まれることが挙げられる。春の部を例に分析を行う。春の部の項目301の中で、解説にPoétを含む季語は38、Sensaçãoを含む季語は61(うち、両方含む季語24)である。PoétやSensaçãoの解説を含む季題は、時候・天文・地理に偏っており、時候・天文・地理の分類ではそれぞれ半数以上がPoét(诗情)・Sensação(感覚)のどちらかの記述を含む。動物・植物・人事の分類でPoétやSensaçãoの解説を含む季語は10%以下である。傾向として、動物・植物の解説は正式名や生態など事典的な説明が多

く、行事の解説はブラジルの行事についての簡単な説明が多かった。

では、PoétやSensaçãoにはどのような記述があるのだろうか。この部分が、まさに国際ハイクにおける季語の問題のポイント3に関わる部分であると考えられる。辞書的な記述だけでなく詩情や感覚を含めて季語を説明しようとする姿勢は、「伝統的な詩語・詩的感覚の違い」への増田なりの対処方法である。日本の歳時記の影響を受けているのか、それともブラジル独自の詩情・感覚を述べているのか、その部分に注目し、具体的にいくつか例を掲げる。

表1は、『NATUREZA』で日本の感覚・文化の影響を受けていると思われる項目の季語解説を掲げたものである。参考としてその項目の『自然諷詠』の解説も掲載した。

Primavera saudosaは直訳すると「恋しく思う春」となるが、『自然諷詠』の「春惜しむ」のポルトガル語訳と一致する。日本的なイメージから

採用された季語と思われるが、解説の内容は『自然諷詠』や日本の感覚とずれる部分があるのではない。「損失」「消えていく」の語からは春が今現前になく喪失感に焦点がある印象を受け、「惜しむ」の語には春を大切に思いその名残を最後まで感じ取ろうとする姿勢にポイントがあるように思われる。「春の風」の解説は「透明感」「輝く」などから、「風光る」という別の春の季語を想起させる。「春の山」も同様に「山笑う」の影響が強い。「霜による損害」は「霜害」という日本の季語に対応する。ただ、日本でもこの季語の例句は少なく、「霜くすべ」「忘れ霜」などの形で詠まれることが多い³¹⁾。コーヒー園の霜害のイメージであればブラジルのと言えるかもしれないが、その事象に季節を感じるのには日本の影響である。

次に、『NATUREZA』でPoétやSensaçãoにブラジルの感覚の記述があると思われる項目の季語解説を掲げる(表2)。

表1：『NATUREZA』で日本の感覚・文化の影響を受けている項目の季語解説

項目	項目日本語訳	季題分類	解説 (P)	解説日本語訳	【参考】 『自然諷詠』解説
Primavera saudosa	恋しく思う春 (春惜しむ)	時候	Sensação de perda; de alguma coisa que vai se perdendo na distância. Poét. nostalgia.	損失の感覚。何かが遠くに消えていくような気がする。詩情：ノスタルジー。	春惜しむ 過ぎゆく春を名残り惜しく思う心持。惜春。
Vento de primavera	春の風	天文	Vento tépido e suave que causa sensação de tranquilidade e transparência. Poét. vento brilhante.	のどかさや透明性の感覚を思い出せる、穏やかで温かい風。詩情：輝く風。	春風 柔らかなそよ風。春のなごやかさを感じさせる。 *風光る
Montanha de primavera	春の山	地理	serra de primavera. Poét. montanha sorridente. Sensação de proximidade.	春の山地。詩情：微笑む山。近接の感覚。	山笑う 明るい感じの山が笑うようだと表現した。『臥遊録』の詩句から生まれた季語。笑う山
Dano pela geada	霜による損害	人事 (J:天文)	Efeito causado pela geada e vivenciado pelo homem. A geada retardada causa grande prejuízo à plantação. Poét. sensação de perda, prejuízo, tristeza.	人間が経験する、霜による被害。先延ばした(時期外れの)霜は農業に大きな損害を起こす。詩情：損失、損害、悲しさの感覚。	霜害(天文) 春になってからの霜は農家の命取り。霜害は農業への影響も大きい。特に珈琲地帯の被害は痛々しい。

表2：PoétやSensaçãoにブラジルの感覚の記述がある季語とその解説

項目	項目 日本語訳	季題分類	解説(P)	解説日本語訳	【参考】 『自然諷詠』解説
Chuva-de-caju	カジュウの雨	天文	NE. Chuvas que caem entre setembro e outubro e favorecem a maturação dos caju. Poét. chuva-da-esperança.	東北地方：9月から10月にかけてたびたび降る雨。カジュウの実の健康に大事な自然現象。詩情：希望の雨。	カジュウの花が咲きそめるころ9月から10月にかけて降る雨。カジュウを宥ませる慈雨としてよるこばれる。珍しいブラジルらしい季語
Lirio-branco	白色ユリ	植物	Desig. comum a numerosas plantas liláceas, com flores alvas, amplas e perfumadas. Exóticas e ornamentais. Poét. símbolo da inocência. Pureza.	複数のユリ科の植物の総称。芳香のある、広々とした花。エキゾチックで装飾的。詩情：素朴さの象徴。純粋。	(夏) 種類多く、栽培種のほか山野に自生。多年草。鱗茎がある。花の色はさまざま。
Semente	種(たね)	人事	Sementes em geral: de flores, hortaliças, frutas e também tubérculos (batatas) e cereais, associadas ao ato de plantar ou replantar. Poét. sementes de esperança. Sensação de eternidade.	植えることや植え直すことが連想される、一般的に種のことをさす(花、野菜、果物、塊根、穀類などのタネ)。詩情：希望の種。永遠性の感覚。	【たねもの】 貯えてあった花種、野菜類、禾穀類、芋類、その他の種子をいう

「カジュウの雨」は典型的なブラジル季語である。雨に敏感な日本的な感覚から見いだされた季語ではあるが、ブラジルの人が慈雨として感じており、もともとブラジルにその言葉があるらしい。「白ゆり」は詩情として「素朴さの象徴。純粋」とある。これは、西洋の花言葉のイメージに近い。日本的ではないが、ブラジルの、と言えるかどうか疑問が残る。「種」は、日本の季語の言い方では「種物」となる。日本では「希望の種」や「永遠性の感覚」といったイメージはあまりないのではないかと。かといってこれもブラジルのというより西洋的であり、種から連想される一般的なイメージのようにも感じる。

以上の分析から考察すると、解説にPoétやSensaçãoを積極的に記述しブラジルの自然の独自性を出そうと試みていること、その過程で日本の歳時記の記述の方法を生かそうと努力していること、それらの試みが主に時候・天文・地理の季語において主に行われていること、がわかった。ブラジルの感覚を含めたブラジル人のための歳時記作成を心がけた点では増田1996の主張に沿

た編集であるが、日本的な部分が残る解説やブラジルのイメージとは必ずしもいえない解説もいくつかあり、増田の逡巡や苦勞が感じられる。「その民族特有の象徴的な意味合いを有するキーワード」「文化的記憶」を最初から一つ一つ叙述するのは容易なことではない。ましてや、ブラジルのような移民国家は多種多様な背景・文化を持つ人々が集まった国であり、国としての伝統的文化はないに等しい。そのような国での国際ハイクの季語の問題、ブラジルの「伝統的な詩語・詩的感覚」を探し出す作業は難航したにちがいない。³²⁾

6 結論

6.1 季語をめぐるブラジルハイカイのオーセンティシティと国際ハイクのスペクトラム

本論文では、増田恆河のブラジルハイカイにおける活動、主に彼の三つの論考とポルトガル語歳時記の分析を通して、国際ハイクにおける増田恆河の季語についての考えを追ってきた。増田は有季ハイカイこそが俳句の真髓を受け継ぐハイカイ

と考へ、季語の理論を提唱し、その理論に基づいて有季ハイカイの実践をグループで行なった。さらには、その理論的背景を持つポルトガル語歳時記を編纂した。増田恆河が提唱するブラジルハイカイのオーセンティシティは、季語の重要性の理論だけでなく、実作や歳時記の編纂などの実践活動も含まれる。

彼の理論のポイントの一つがブラジル季語であることは先に述べた。付け加えるなら、ブラジルの「自然」にこだわった、ということである。アメリカその他の国では無季の季語を認めるのに対し、ブラジル歳時記では日本語でもポルトガル語でも無季を設けていない。その点では季節を重視している³³⁾と言えるが、彼はしばしば「ハイカイはブラジルの自然を諷詠する短詩である」とし、その自然の中に季節感があるとする。彼が作成した歳時記はどちらも「自然」の語が入っていることから、彼が「自然」を重視していたことがわかる。もう一つのポイントは、伝統的な詩語・詩的感覚だが、これは季語との格闘の中から見出すしかなく、地道に有季ハイカイを実践している。3で挙げた、国際ハイクにおける季語の問題のポイントのすべてを検討している点で、季語についての理解が深いことがうかがえる。

ヨーロッパと比較すると、日系移民がいるアメリカやブラジルのほうが、季語の理論の深化が進んでいるように感じられる。ヨーロッパにはその国独自の歳時記を作成した例がイギリスとスペインにあるが各一冊である。それに対しアメリカでは、有季定型研究会が地域歳時記、ウィリアム・ヒギンソンが本格的な歳時記を作成している。ブラジルでも、日系俳句の歳時記とポルトガル語歳時記が作られている。日系俳句の歳時記もポルトガル語歳時記も項目数が1000を超え、解説と例句があり完成度が高い。

これは、日本の俳句と国際ハイクの間には日系俳句が介在することが関係しているように思われる。2.2で述べたように、日系移民による俳句の存在は、北米・南米の国際ハイクの特徴であり、国際ハイクの多様性をさらに豊かにするものであ

る。日系俳句は、外国語で詠まれた国際ハイクと日本の俳句の中間に位置するような存在であり、国によって日系人の人口や日系社会の性質が異なれば、日系俳句やその国の国際ハイクのあり方も一様ではない。ブラジルとアルゼンチンでは日系人口³⁴⁾が190万人と6.5万人なので約30:1となる。アルゼンチンで日系俳句の歳時記ができなかったのもうなずける。アメリカの日系人は130万人、ハワイの日系人は24万人で合わせるとブラジルの日系人口に近づくが、家族単位での移民が多く、各地で日系居住地のコミュニティが発達したブラジルのほうが結束力が強いと思われる。それゆえ、日系俳句の層が厚く歳時記も多く出ているのではないだろうか。

東・藤原(2012)では、ブラジル日系俳句の歳時記を含めた国際ハイクをすべて横並びに扱っているが、今後の国際ハイクの研究は、日本の俳句、日本人の海外詠、外国人による日本での英語ハイク、日本語ハイク³⁵⁾、外国語による国際ハイクをスペクトラム³⁶⁾として捉えた考察も必要となるだろう。1節の用語説明において、「国際ハイク」の説明として「日本以外で詠まれる俳句、多くは外国語で詠まれる」と述べたが、次のように改めて定義したい。日本人が日本語で日本において詠む「日本の俳句」に対し、「国際ハイク」とは「日本人—日本—日本語」という前提がどこか異なる俳句である。だからこそ、そのうちの1つ異なる場合、2つ異なる場合、3つとも異なる場合それぞれ分けて検討する立場があってよいのではないか。

6.2 ハイカイと俳諧、連句

ブラジルハイカイでは、増田恆河という個人が日系俳句の俳人の立場を超えてブラジルハイカイへの仲介者となり、季語こそハイカイの本質であると提唱・活動し、大きな影響を与えた。また、アメリカのヒギンソンも有季ハイクの推進活動を行い本格的な歳時記を作成し俳句の本質としての季語を論じた。この二人には、ある共通点がある。それは、連句に熱心だったことである。

俳句が季語を必要とする起源は連句の発句にある。「3 日本における季語・季題の成立」でも述べたが、連歌では、一卷に式目（連歌のルール）にしたがって季節の語を配置する必要上、季語の季節をただ一つに限定する必要が生じたので、連歌の発句も季語を必要としたのである。季語を研究すると連句に行き着くのは単なる偶然ではない。増田（1996）にも、研究会で連句を行うようになって季語の必要性が一層理解された、と述べられている。季語の起源として、連句も季語をめぐるハイカイのオーセンティシティの文脈の中で重要な要素の一つとなっていたと考えられる。

以上、ブラジルハイカイの例を通じて、国際ハイクにおける季語のオーセンティシティの問題の具体相をみてきた。日系俳句の営みを土台として日本の俳句をブラジルに移植した増田恆河の仲介行為は、理論の構築、句会の立ち上げ、歳時記の作成など多岐にわたる。今後の課題として、増田恆河がこのような仲介行為を行なった理由、増田の連句活動、ブラジルハイカイと教育の関わりなどを挙げて筆を擱く。

【注】

- 1 尾形仇他編『俳文学大辞典』p.714「俳句」の項（草間時彦・小室善弘執筆）
- 2 川本皓嗣『日本詩歌の伝統—七と五の詩学—』、岩波書店、1991、p.92
- 3 アストンの『日本語文語文法』第二版（W.G.Aston, "A Grammar of the Japanese Written Language", Second Edition, M.A., Trübner & Co., Ludgate Hill, London; Lane, Crawford & Co., Yokohama, 1877）で発句の説明を行なったのが、外国語の書物で初めての例である。さらに、『日本文学史』（"A History of Japanese Literature", C.M.G., D.Lit., William Heinemann, London, 1899）でも、近世の俳諧に触れている。
- 4 1902年に『芭蕉と日本の詩的寸句』（B.H. Chamberlain, "Basho and the Japanese Poetical Epigram", Transactions of the Asiatic Society of Japan 1902）を出版。
- 5 クーシューは1903-4年と1912年の2回来日し、1905年にハイカイ集『水の流れにそって』（Paul-Louis Couchoud "Au fil de l'eau", 1905.）を出版する。さらに1906年に文芸誌「レ・レトル」に「ハイカイ、日本の詩的寸句（エピグラム）」という俳句の解説記事を掲載、のちに改題し『アジアの賢人と詩人』（Paul-Louis Couchoud "Sages et Poètes d'Asie", Calmann-Lévy, Paris, 1916.）を出版する。
- 6 俳句が紹介された20世紀初頭は、まだ「俳句」の概念が定着しておらず、近世の俳諧を中心に紹介されたことから、フランスやブラジルでは俳句のことを「ハイカイ」と呼んだ。1節末参照。
- 7 内田園生『世界に広がる俳句』、角川書店、2005、p.67
- 8 金子美都子・柴田依子共訳『明治日本の詩と戦争—アジアの賢人と詩人』、みすず書房、1999、p.37
- 9 金子美都子「フランス国際ハイクの進展と季節の詞」（東・藤原編2012所収）pp.218-219
- 10 「はしがき」（東・藤原編2012）pp.8-9
- 11 クラウリー「アメリカの歳時記精読—ヒギンソンの『Haiku World 俳句の世界』他」（東・藤原編2012所収）で内容が紹介されている。
- 12 坂口明子「『英国俳句協会』『英国歳時記』デーヴィッド・コブ氏に聞く」（東・藤原編2012所収）
- 13 井尻（2019）p.129
- 14 栢野（2006）pp.212-214
- 15 藤原マリ子「ブラジルの歳時記—成立の経緯と特徴」（東・藤原編2012）、細川周平「季語のない国—ブラジル季語をめぐる」（細川2013）
- 16 日系人の俳句は日本からの移民が日本語で詠んだ俳句であり、季語の問題を、現地語すなわちポルトガル語によるブラジルハイカイと同列に論じることには慎重でありたい。季語の問題について、日本俳句—日系俳句—国際ハイクの段階をスペクトラム（連続体）と捉えて検討したほうが生産的ではないか、というのが本論文の立場である。
- 17 日系人の世代の移行や社会状況（日系社会の有無、家族単位の移民の多寡など）により日本語使用の状況も国ごとに異なる。日本語が話せず現地語で日系人が俳句を詠む場合、日系俳句と呼べるかどうかは疑問。日系文学が日本語文学からポルトガル語文学へ移行する過渡期的な現状を「汽水域」と呼ぶ論（杉山2019）もある。
- 18 シェーロ・クラウリー「アメリカの俳句におけ

- る季語」「アメリカの歳時記精読—ヒギンソンの『Haiku World 俳句の世界』他」(共に東・藤原2012所収)。前者によれば、1950年代以降季語や自然をめぐる議論が活発化し、自然とつながり自然を詠むのがハイクだ、ハイクはもともと連歌の発句だから季語が重要だ、などの意見が出て、また有季定型ハイクのグループも現れたことなどを紹介している。
- 19 「季語」「季題」という言葉自体は近代から使われ始めた言葉で、その概念については他にも山本健吉、筑紫磐井、宮坂静生などの論者がいる。季題は「題詠の際に作者に課された季節に関する題目」(『俳文学大辞典』)のことであり、厳密には季語と重ならない部分もあるが、本論文ではその違いに深入りしない。なお、『俳文学大辞典』の「季題」の項は尾形叡執筆。
- 20 川本(2019) p.28
- 21 増田(1986) p.107. 同論文によれば出典は「(フォンセッカ・ジュニオール著『ヴェンセスラウ・デ・モライスとその他の思い出』1980, pp.120-121参照。筆者意訳)」とある。同論文には、1939年発足の伯日文化研究会でフォンセッカ・ジュニオールが俳句の情報を得ていたこと、増田自身が1937年以来彼に俳句の情報を提供していたことが述べられている。
- 22 増田(1986) pp.118-119
- 23 俳誌『雪』159(1990.12), 190(1993.7)に掲載された増田恆河のエッセイに子どもハイカイについての言及がある。グレミオ・ハイカイ・イペーには小学校の教員の参加が多く、2000年代にはハイカイ教育活動に発展する。その詳細についてはDebora(2019)参照。
- 24 『俳句文学館紀要』が出版されたのは1994年8月だが、論文の末尾に「1993・9・22脱稿」とある。
- 25 増田(1994) p.28
- 26 増田(1994) p.29
- 27 この段落には「季語」という言葉がなく、「俳句の真髓」や「日本の俳句の押し付け」の「日本の俳句」、「俳句の模倣」の「俳句」が具体的に何をさすか明示されていないが、前段落では季語が話題になっており、また増田(1996)では「日本の俳句の押し付け」などここに登場するフレーズが季語の説明の中で出てくるので、「季語」をさしていると解釈する。
- 28 白石(2021)参照
- 29 日本語のブラジル歳時記は、1月から始まる歳時記が多い。ブラジルは南半球なので、1月の季節は夏である。
- 30 増田(1996) pp.9-10
- 31 ちなみに、『ホトトギス歳時記』では「霜くすべ」の項に別季語として「霜害」があり、「霜害」の例句として佐藤念腹の句が挙げられている。
- 32 なお、季語の民族特有のイメージ、文化的記憶は、詩の実作により形成される側面がある。増田恆河も歳時記を作成する準備として1990年代前半にポルトガル語の季語別アンソロジー句集、個人句集を複数プロデュースし、それらを例句として『NATUREZA』に取り入れている。本論文では紙幅の関係で例句を考察対象に含めていないことを予め断っておく。
- 33 ブラジルは南半球に位置し、日本と季節が逆転するので、北半球の国際ハイクより季節に対する悩みが大きかったと思われる。
- 34 公益財団法人海外日系人協会サイト <http://www.jadesas.or.jp/aboutnikkei/index.html> (2021.4.5確認)による。
- 35 日系人の俳句をさすが、日本語文学の一分野として捉えるなら台湾などコロニアル俳句、ポストコロニアル俳句の可能性を含め「日本語ハイク」とする。
- 36 スペクトラムとは「意見・現象・症状などがいまの境界をもちながら連続していること」である。国際ハイクの考察にあたり、日本との距離や日系人の多寡などを視野に入れて分析する視点も必要だと思われる。

【参考文献】

- Aston, W.G. "A Grammar of the Japanese Written Language", Second Edition, M.A., Trübner & Co., Ludgate Hill, London; Lane, Crawford & Co., Yokohama, 1877
- Aston, William George, *A History of Japanese Literature*, C.M.G., D.Lit., William Heinemann, London, 1899.
- Blyth, Reginald Horace, *Haiku*. Tokyo: Hokuseido, 1949-1952.
- Chamberlain, Basil Hall. *Basho and the Japanese Poetical Epigram*, Transactions of the Asiatic Society

- of Japan, 1902.
- Couchoud, Paul-Louis, *Au fil de l'eau*, 1905.
- Couchoud, Paul-Louis, *Sages et Poètes d'Asie*, Calmann-Lévy, Paris, 1916.
- Higginson, William J, *Haiku World: An International Poetry Almanac*. New York: Kodansha International, 1996.
- Higginson, William J, *The Haiku Seasons: Poetry of the Natural World*. New York New York: Kodansha International, 1996.
- Kervern, Alain (traduction et adaptation), *Grand Almanach poétique japonais; Matin de neige*, Le nouvel an, Livre I, Editions Folle Avoine, 1988. *Le Réveil de la loutre*, Le printemps, Livre II, 1990. *La Tisserande et le bouvier*, L' Eté, Livre III, 1992. *A l'ouest blanchit la lune*, Livre IV, 1992. *Le vent du nord*, L' Hiver, Livre V, 1994.
- Machmillar, Patricia and Tokutomi, Kiyoko, *Monterey Peninsla and Bay Regional Saijiki*. n.p.: Yuki Teikei Society, 1993.
- Masuda Goga, Teruko Oda. *NATUREZA-BERÇO DO HAICAI KIGOLOGIA E ANTOLOGIA*. Empresa Jornalica Diario Nippak Ltda, 1996.
- Motoyama, Gyokushu. *Hawaii Poem Calendar: Hawaii Saijiki*. Honolulu: Hakubundo, 1970.
- Ota, Seiko y Gallego, Elena, *Kigo- Lapalabra de estacación en el haiku japonés*. Poesia Hiperion, 2013.
- Sakuma, Junichi, *Season Words in English Haiku*. San Jose, CA: Yuki Teikei Haiku Society, 1980.
- Takahama, Kyoshis, *Singen von Blüte und Vogel*. Nagatashobo, 2004.
- Taveres, Debora Fernandes, *Grêmio Haicai Ipê - um desdobramento do haikai no Brasil*. Dissertação apresentada ao Programa de Pós-Graduação em Língua, Literatura e Cultura Japonesa da Faculdade de Filosofia, Letras e Ciências Humanas (FFLCH) da Universidade de São Paulo, 2019.
- 東聖子「国際俳句の概要と可能性—江戸後期の萌芽からジャポニスムをへて現代へ—」『近世文学研究』新編2, 文学史探求の会, 2017. 12
- 東聖子・藤原マリ子編『国際歳時記における比較研究—浮遊する四季のことば』, 笠間書院, 2012
- 有馬朗人・芳賀徹・上田真・金子兜太・ジャン=ジャック・オリガス・宗左近「松山宣言」, http://fukiosho.org/archive/reference/Matsuyama_Declaration_Japanese.pdf, 1999 (2021.4.2確認)
- 井尻香代子『アルゼンチンに渡った俳句』, 丸善プラネット, 2019
- 内田園生『世界に広がる俳句』, 角川書店, 2005
- 尾形侑・草間時彦・島津忠夫・大岡信・森川昭(編)『俳文学大辞典』, 角川書店, 1995
- 川本皓嗣『日本詩歌の伝統—七と五の詩学—』, 岩波書店, 1991
- 川本皓嗣『俳諧の詩学』, 岩波書店, 2019
- 栢野桂山「俳諧小史」清谷益次・栢野桂山(著)『ブラジル日系コロニア文芸 上巻』, サンパウロ人文科学研究所, 2006
- 島田法子「俳句と俳句結社にみるハワイ 日本人移民の社会文化史」『日本女子大学紀要 文学部』57, 2007, p.p. 55-75
- 白石佳和「『自然諷詠』とKigologiaをめぐる一日系俳句とブラジルハイカイの仲介者増田恆河の果たした役割」, 第13回ブラジル日本研究国際学会予稿集, 2021
- 杉山欣也「日本語文学の汽水域—日系ブラジル文学の現在—」『昭和文学研究』78, 2019.3.
- ハルオ・シラネ, 衣笠正晃訳『芭蕉の風景 文化の記憶』, 角川書店, 2001
- ポール=ルイ・クーシュー著, 金子美都子・柴田依子共訳『明治日本の詩と戦争—アジアの賢人と詩人』, みすず書房, 1999
- 細川周平「季語のない国—ブラジル季語をめぐる—」『日系ブラジル移民文学Ⅱ 日本語の長い旅 [評論]』, みすず書房, 2013
- 増田秀一「ブラジルにおけるハイカイの季語」『俳句文学館紀要』9, 1996, pp. 1-14
- 増田恆河編『ブラジル俳句・季語集 自然諷詠』, 日伯毎日新聞社, 1995
- 増田秀一「ブラジルにおけるハイカイの近況」『俳句文学館紀要』8, 1994, pp. 13-30
- 増田秀一「ブラジルのハイカイ」『俳句文学館紀要』4, 1986, pp. 99-119
- Guilherme Castro 氏に文献翻訳のご協力を, エウニセ・スエナガ氏・杉山欣也氏に, 研究資料の提供や有益なご助言をいただきました。心より感謝申し上げます。

なお、本論文は、科学研究費補助金（基盤研究（B）、課題番号 21H00520）の交付を受けて行った研究成果の一部であります。